

## 国民総幸福度（GNH）

稲宮 健一

中国とインドの間のヒマラヤの高地にあるブータン王国は国民総幸福度という開発哲学を掲げ世界に広めている。今回、旭硝子財団がこの考へ方を拝聴しようと、第四代ブータン国王をお招きした。代理に王女殿下が来日し講演をされた。旭硝子財団は一九九二年から毎年、世界の環境保全に寄与した人をブループラネット賞で顕彰している。因みに最初の受賞者は昨年ノーベル賞を受賞した真鍋叔郎博士であった。

ブータンは人口八七万人、九州ぐらいの広さの高地にある立憲民主国で、総選挙で民意を反映できる政治形態を持つ仏教国である。産業はGDPの三五％は農業と林業、通常は国家予算の規模で、国の豊かさを計るが、ブータンは独自の指標で豊かさを示す考えを公開している。この発想は現在の国王が提唱した国是で、各国並みにGDPの拡大を目指すのが、経済はあくまで手段で、国民に優しさ、平等、思いやりのある治世を目指す、医療費の無料、森林の保全、教育の普及に努めるとのこと。国の収入はインドへの水力発電電力の売電収入で外貨を得ている。環境保全では森林が国土の四〇％であるが、六割を目指す、国が伐採の管理を行い緑の保全に努めている。

国民の総意としての幸福度を社会的指標として使うことは国連でも採用されていてOECD（経済協力開発機構）の報告書にも使われ始めた。ブータンの様に一次産業主体の国では、国内での等しい豊かさは実現されやすいが、大国で実現するのはなかなか難しそうだ。

我が国では武家社会の頃、小さな藩毎に地方自治が成立ち、この自治と幕府の妥協点で国が動かされてきた。民主的とは言えないが、このぐらいの単位の自治は端まで目が届き、多くの複数の意見が飛び交う状態が全体としてまとまりやすいように思われる。是非、ブータンにあつては、一次産業から環境保全指向した未来社会に適した幸福な社会の見本を示して欲しい。とかく強大権力で動かす社会がある中で一服の清涼剤である。